

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2014年11月8日

文責：JUN

## グループの学びは個人作業の協同化

「学びの共同体の授業における協同的学びは『集団学習（班学習）』ではなく『個人作業の協同化』として展開する」

これは、『総合教育技術』（小学館）11月号「学び合う教室・育ち合う学校」における佐藤先生の言葉です。この言葉を目にしたとき、授業づくりの過程で教師たちが抱いていた次のような疑問に答えることができると思いました。

「グループの学びが大切なのはわかります。けれども、その前に一人ひとりに自分の考えをもたせないといけないのではないのでしょうか。そうしないとグループの話し合いに入れない子どもが出てしまうからです。ですから、一人学びはなくてもよい、いきなりグループをさせたほうがよいという考えが理解できないのです」

### 1 協同的学びは子どもの必要感によって始められるもの

そもそも「協同的学び」には、一人学びとグループ学びを区別するという考え方は必要ないのではないのでしょうか。一人学びのなかにグループ学びがあり、グループ学びのなかに一人学びがあるのではないのでしょうか。

そのことがはっきり見られた授業がありました。それは、小学校における算数の授業でした。教師から課題が出されると、教師が何も言わなくても子どもたちはめいめいその課題に取り組み始めました。一見して、それは、一人学びが始まったように見えました。ところが、さほど時間がたたないうちに、あちらでもこちらでも、隣同士のかかわりが始まったのです。ペアによる学び合いです。あるペアでは、男の子が横の女の子にそっと語りかけました。女の子はおだやかな表情でそれに応じています。たぶん、男の子のほうにわからないことがあって女の子に尋ねたのでしょう。しばらくして尋ねた男の子がうんとうなずきました。どうやら疑問は解けたようです。別のペアでは、女の子が自分のノートをずっと男の子の方に寄せました。それは、これでいいの？という確かめのように見えました。ノートを見た男の子が黙ってうなずきました。すると女の子はうれしそうに笑ってまた自分のノートに向かいました。教室の後ろのほうでは、一人の子どもがいきなり横の男の子のほうに体を乗り出すようにしました。そして、ノートに書かれていることに対して何か言い、頭をくっつけ合うようにした2人のかかわりが始まりました。全く対話しないのだけれどペアの子から学んでいる子どももいます。ちらちらと横の子の書いていることをのぞいている子どもです。横の子はその動きに気づいていてそんな彼の視線を受け入れているようです。

わたしは、このような子どもたちの様子をほれぼれとしながら見つめていました。この教室には、学びから外れている子どもは一人もいない、それを可能にしているのは子ども同士の「つながり」なのだとしみじみと感じたからです。しかもそのつながりが全く自然なのです。この自然なつながりがあることによって、子どもたちは一人として孤立していません。ですから、一人として学びから外れることがないのです。

協同的学びは教師から「ペアをしましょう」「グループで考え合いましょう」と指示することによって始めるものだと固定的に考えている教師には、こういう教室の光景は生み出せないでしょう。協同的学びは、子どもの必要感によって、子どもによって始められるのがもっともよいことなのです。しかし、長く教師の指示による授業を受けてきた子ども、学ぶということを個人の努力に閉じ込められてきた子どもは、友だちに尋ねてもよいと言われてもそれがなかなかできないのです。わからないことは恥ずべきことという価値観があり、おまけに協同的に学ぶ経験が乏しいからです。だから、教師から「ペアやグループにして学び合いましょう」という声掛けが必要なのです。しかし、いつまでもそれでよいと考えてしまうと協同的学びの良さは半減してしまうでしょう。

## 2 学び合いは話し合いではない

グループやペアによるものであっても、学級全員で行う全体学習であっても、学び合いは話し合いではありません。ところが、多くの授業で教師は、「グループで話し合いましょう」「みんなで話し合いましょう」と言っているのではないのでしょうか。

よく考えればわかることですが、話し合うことが目的なのではありません。一人ひとりの学びを深めることが目的なのであり、そのため、仲間の考えと擦り合わせ考え合うようにするのです。それを「話し合いましょう」と言ってしまうと、知らず知らず話し合うことが目的になってしまうのです。そこには、ただ自分の考えを出して語り合えばよいという誤った価値観が生まれてしまう危険性があるし、もっとよくないのは、教師が、話し合われている内容を吟味しないまま話し合っているという様相だけで満足してしまう傾向に陥ってしまうことです。教師をそういう外見적인見方に留めてしまう元凶が「話し合いましょう」という不用意な一言なのです。

前述した授業の子どもは、本当の意味での学び合いをしていると言ってよいのではないのでしょうか。教師から「話し合いなさい」という指示は出ていません。ですから、話し合うどころか、ほとんど言葉を発しないかわりも生まれています。けれども、何人もの子どもが隣の友だちから学んでいるのです。

この子どもたちを見ればはっきりわかることですが、すべての子どもがそれぞれに問題に取り組んでいます。それは俗に言う「一人学び」をしていると言ってよいでしょう。けれども、その一人学びは、孤立した一人ひとりに閉じ込められたものではありません。必要があれば、ごく自然に、当たり前のように隣同士のかかわりを実行しているのです。それは「協同的学び」です。まさに、一人学びのなかにグループ（ペア）学びがあり、グループ（ペア）学びのなかに一人学びがあるのです。大切なのは、一人ひとりの子どもが自らの学びを深めたいからペアの相手へのかかわりを求めているということです。

もともと協同的学びは、話し合っ一つ考えを導き出すことが目的なのではなく、一人ひとり

の考えを深めるために行うべきものです。ですから、かつてよく見られた「班（グループではなく班と言っていた）の考え、発表しましょう」などという教師の促しはおかしなこととなります。学び合うということはグループで一つの考えをつくり出すことではないからです。もちろん、たまたま一つの考えに絞られることもあります。しかし、それは一つにすることを目指した結果ではないということが大切です。

子どもの必要感によって行うのが協同的学びなのだという原則、話し合うのが目的なのではなく学び合うのだという原則、一人ひとりの学びの深まりを目指すのが目的なのだという原則を忘れてはならないのです。

### 3 パターン化する危険性

冒頭に掲げた教師たちの「一人ひとりに自分の考えをもたせないといけないから、まずは一人学びをしてからグループ学習なのではないか」という考えは、多くの教師たちに共感されるものだと思います。何も考えをもたないまま何人かで考え合うことになったら、ただそこに座っているだけの子どもも生まれるというのが、長年子どもにかかわってきた実感だからです。

しかし、そこに、ここまで述べてきた「一人学びのなかにグループ学びがあり、グループ学びのなかに一人学びがある」という考え方はないのではないのでしょうか。そして、一人学びをしてからグループ学びをするというパターンに陥っているのではないのでしょうか。

そのパターンにはまっている授業を見ていて、心が痛くなる光景に出会うことがあります。それは、まずは「一人学び」だということで、それぞれの子どもが黙々と取り組んでいるときに生まれます。どう考えてわからない子ども、これでよいのかと不安を感じている子ども、何かに気づいたのだけれど確信がもてない子ども、そういう子どもがだれにも声をかけられず茫然としているのです。協同的に学ぶことを禁じられているからです。こういう子どもにはだれかとかかわりたいという必要感があります。けれども、その必要感を満たすことができず、孤立させられ、じっと時間の経過を待っているのです。この時間が長ければ長いほど子どもの学びは停滞します。

もちろん、わからなくても、だれかに聞いてもらいたいことがあっても、まずは一人でとことん考えてみるのがいけないということではありません。そういう停滞はかえってよい結果を生むこともあります。しかし、そうであっても、いつもいつもパターンになってしまうことはよいとは言えません。ケースバイケースでなければいけません。

学ぶということを個人の努力だけに封じ込めてはなりません。もともと学ぶということは、他者から獲得するという意味合いが強いのです。学び上手は、他者とのかかわり上手、聴き上手です。その他者とのかかわりの必要感が生まれたとき、ずっとそれを実行してもよい、それが普通なのだという「学びの作法」を子どもたちのものにするのが大切なのではないのでしょうか。そうすれば、子どもたちはどれほどの安心感を抱くことができるのでしょうか。その安心感があるから、ここはとことん考えてみようということもできるわけです。もちろん、その「学びの作法」には、他のみんなの迷惑にならないようなかかわり方をしなければいけないというマナーも必要ですが。

一人学びをしてから、グループ（ペア）学びをするというパターン化はよいことではありません。けれども、とにかく話し合いなさいと言わんばかりのグループ（ペア）をさせれば、話し合いに入

れない子どもをつくります。ですから、一人学びをしないでいきなりグループで話し合わせればよいという考え方もよいとは言えません。大切なのは、「一人学びのなかにグループ学びがあり、グループ学びのなかに一人学びがある」を具現化することです。それが、佐藤先生のおっしゃった「協同的学びは個人作業の協同化」ということなのではないでしょうか。

## 学びの深まりを生み出す3要素

「学びの共同体」の学校、「学び合う学び」に取り組む教師たちが、いま、もっとも望んでいるのは「学びの深まり」です。それには、次の三つの要素が不可欠であり、そのうち一つ欠けても深まりは実現できないと考えます。

### 課題の質

学びの深さは、何に取り組むかという課題の質に大きく左右されます。どれだけ誠実に取り組んでも、取り組んでいる課題の質が低かったら深い学びに達することはありません。教師たちの授業を見せてもらって、課題が易しすぎると感じる事がかなりあります。教科書通りなぞるように指導している教師もいます。学びの深まりを実現するには、質の高い課題を、子どもが取り組んでみたいと思えるように提示することがなんとと言っても必要です。子どもにとって魅力的なのは、やさしいことをくどくど考えることではなく、ジャンプの学びなのです。

### 夢中になる意欲

どれだけ質の高い課題を準備しても、子どもにそれに挑む意欲がなかったら学びは深まりません。一歩足を踏み入れただけで「ああ、いいなあ」と感じる教室には、目を輝かせて取り組む子どもの意欲が満ちています。教師が指示してやらせる授業、一方的に教える授業、子どもが教師の顔をうかがっている授業には、夢中になる意欲は存在しません。

子どもが夢中になるということは、一人ひとりが課題に挑んでいるということです。そこにはそういう気持ちにさせる教師が存在しています。

### 子どもと子どものつながり

質の高い課題に挑む意欲があっても、一人では深まっていきません。そこに、協同で学び合う仲間がいるかいないかは大きなことです。学びは他者との学び合いによって深まっていくのです。子どものつながりのない教室にしてはなりません。

以上三つのことはそれぞれ別々に存在しているわけではありません。一体のものです。一つ欠けてもだめだし、二つが高まるともう一つも高まっていくはずですが、しかし、その実現は簡単なことではありません。教師にはさまざまな状況があるのであり、その困難さに立ち向かう覚悟が必要です。あきらめないことです。本気になることです。子どもはその本気さに応えてくれます。